

第 1 講：開講 20 周年記念講演

天理教神学の輪郭と課題

おやさと研究所所長 深谷忠一

天理教神学・教義学の確立とは、天理教の信仰内容を学問的に基礎づけることを目的とする営みであります。親神様と私という二人称の立場で相対する関係を、親神と私と彼(女)・彼らという三人称的立場に拡げて、親神の啓示される言葉の本質的な意味を尋ねて、それを一般の論理的洞察にゆだねることができるように整備する営みであります。それは、神の言葉を理知的批判に曝そうとするのではなく、直接的個人的啓示の真理を、反省的一般的立場で受けられるようにすることなのです。

しかるに、その教学研究を進める研究者は、教義学は教会・教団の論理的作用で、主体は教会・教団であることを常に認識し、研究したことを自らが実行することが肝要であることをも自覚しています。つまり、我々が天理教の信仰に生きつつ、その信仰的内容を現代知性の下に検証しようとするのが、神学・教義学の研究なのです。

そして、その時代に適応する神学・教義学を提示するためには、時代が進んでから、ことが起きてから、後から追いかけて議論するのではなく、親神の真理に基づいた社会への水先案内をするべく、現代的かつ未来的立場から、社会の変化に対応して、天理教教義学の答えを明らかにしていかなければなりません。

昨今、天文・物理学のフィールドでは、ヒッグス粒子の発見によってビッグバン理論が完成したかのように言われ、その結果、あたかもこの世の生成や物質の本質が全て解明できたかのような印象が持たれるようになっていきます。また、“デザイナーベビー”、“iPS 細胞”など、今までは純粋に神の領域だと考えられていたことが、あたかも、人の手でコントロールできるように感じられるようになって、新しい唯物論が、世の人々の心を支配する恐れも、出てきているように思えます。

しかるに一方では、“ダークマター”、“ゆらぎ”、“ウイルス”などの言葉が示すことの内容・実態が明らかになってきて、存在と非存在・物質と非物質、生命体と非生命体・有機物と無機物の境界を、理論的に明らかにすることの困難さが認識されるようになっており、そこに神の手を感じざるを得ないと思わせる事態にもなっています。

このような現代科学の成果の状況を鑑みながら、

“この世とは何か”

“生命とは何か”

“人間とは何か”

を、天理教神学・教義学の立場から探求し、その上で、

“人間社会のあるべき姿”

“人がたすかるとはどういうことか”

を明らかにしていく。そして、

“全人類の陽気暮らしの究極のかたち”

を、世に示していくべく努力することが、今、これからの「天理教神学の課題」であると考えています。

「天理教教理史的境位」について

おやさと研究所主任 佐藤浩司

はじめに

境位(きょうい)とは、「人や物が置かれている環境や立場。状況。」(小学館『日本国語大辞典』第二版)をいう。したがって、「天理教教理史的境位」とは、「天理教の教理史が置かれている状況」のことである。

深谷忠政は、「天理教教理史的境位」のタイトルで、昭和 45 年、第 7 回天理教学研究会の席上、発表している。この発表は同年、『天理教学研究』第 20 号(道友社)として掲載された。深谷のいう「教理史的境位」とは、「道のしんにお見せいただく理と世界の事情とはあいづ立て合う」という。いわゆる①昭和 43 年に発布された『論達第一号』、②「元初りの話」における九十九年目の出直の強調、③教祖九十年祭をその間に迎えること、を示している。「この画期的な時期にあたって、天理教学研究に従事するお互いは、天理教教理史に於ける自己の境位をみつめて置くことも無意味ではないと思う」(前掲書 3 頁)と述べている。深谷は、この後、教内の識者を集め、「いさみの神学—人類の明日をみつめて—」(『みちのとも』昭和 45 (1970) 年 7 月号～47 (1972) 年 8 月号)を編纂している。

教理の現代的展開

諸井慶徳は、「この信仰の内容なるものこそ教理である。」と述べ、「教理は、信仰内容の言語的表現にほかならない。(中略)かえって言語に則しつつ、しかも言語を乗り越えて、親神の思召へと参究するの熱願を持たずにいられない。」(「教理論」『天理教講座』、著作集第 8 巻、道友社、34 頁)と、語っている。P. ティリッヒは、神学の方法として「呼応の方法」を用いた。極めて単純ないい方をする、神の呼びかけ(啓示)に対して、これに応ずる人間、同じく人間の側からの呼びかけに応ずる神、いわば呼応関係が成り立つというのである。深谷が「教理史的境位」として述べている「微視的教理偏重から巨視的教理拡充へ」や「原典の訓詁註釈から象徴的理解へ」、また「過去から現代に」を「未来から現代に」の主張も軌を一にしているように思う。深谷は、ずばり「現代のこうきを作ろうということが、我々のねらいである。」と述べている。

井上昭夫も、『元の理』は、『ひろめの理ばなし』として理解されるべき重要、かつ全人類にとって普遍的な思想的・論理的側面が啓示されている(『「こぶき」のひろめ』善本社、平成 18 年)と述べて、世界の識者に、それぞれの専門の立場から「元初りの話」をテーマに語らせている。

現代は、新たな教理の体系が求められている。小乗仏教から大乘仏教へと展開したように、内容の理解から意図の理解へと向かわなければならない。その上で、「道のしんにお見せいただく理と世界の事情」の「合図立て合い」を考える必要がある。とにかく今は、世界に見せていただける事柄を、我がこととして受けとめるところに、意味があるのではないかと思う。